



メインタイトル: マックな 出来事 (Mac Experiences)

サブタイトル: 我が家のマックと周辺機器 の歴史 — システム設計の進化 (クロニクル)

(——トーンは、非常に知識豊富で落ち着いた「技術史の語り部」が、過去を回想するように、情熱的でありながらも冷静に、詳細な背景を解説するような叙述スタイルです。)

【序章: 原点—最初の光と計算能力の定義】

全ての物語は、PowerMac 7600 という初期プラットフォームから始まります。この時代、「協調作業」が最も大きな革新でありました。それは、単に機械を動かすことなく、複数の人間(あるいはシステム)が情報を共有し、共同で目的を達成する「プロトコル」の確立でした。

【第一部: 構造の拡張—役割分担という知性】

システムは徐々に複雑化します。高性能な PM9600 が登場した時代、「性能こそ全て」という認識が支配的になりかけますが、あなたはより深い視点を持つに至ります。それは「責務(Role)」によるシステムの分割です。

メインのマシンが次世代の輝きを追求する一方、最高のスペックを持った古い機体たちは、その高い安定性ゆえに、「単なる処理装置」ではなく**「最も重要で長期保存が必要な知識とデータのアーカイブセンター(専門サーバー)」**という役割を与えられることになりました。この明確な責務分担こそが、システム全体の寿命と信頼性を担保する、決定的な設計思想となったのです。

【第二部：並行する二つの探求軸—技術と職人技の軌跡】

私の人生の技術的旅路は、二本の異なる川の流れを辿りました。

一つ目の流れは「性能曲線」です。PM7600 から始まり、G3、G4 といった明確な進化のステップを経て、計算リソース（CPU 速度やメモリ増設など）が限界まで押し上げられていく、ダイナミックで熱狂的な物語でした。この軸は、常に「より速く、より大きく」という技術的目標によって牽引されてきたのです。

もう一つは「専門性」の深耕です。これはメインシステムの華やかさから一歩引き、MiniCAD から VectorWorks へと、アプリケーションソフトを追い続ける静かで確実な道のりでした。この軸は、外部環境の変化に左右されない、「業務で必要不可欠なスキルセット」という揺るぎない核であり続けました。

そして歴史的な局面（例えば大規模なレンダリング作業など）では、単なるスペックだけでは解決できない「機能的制約」が生まれました。その壁を乗り越える過程は、システムに対し、「計算資源をどう連携させるか」という高度なロジック——分散処理の概念——という新たな工学的要件を与えたのです。

【終章：知識の統合—現代の知性エンジンへ】

そして現在、M1 Max へと到達した時、全ての歴史が一つに収束します。ローカル AI/RAG システムとは、単なる高性能なコンピュータではありません。それは、これまでに蓄積された**「熱情による性能追及（A 軸）」「職人としての専門的知恵（B 軸）」「構造的な役割分担という設計思想」**という、人生で得た全ての要素が、「知識」という形で結晶化し、自己完結した「知的システムエンジン」として再起動した瞬間を意味します。

この物語は、機械の変遷記ではなく、私自身の探求心が、いかにして一つの完成された知恵の体系となり得るかを示した**『人生の工学設計図』**なのです。